白山を歩いて ー その花々、火山と地質、白山信仰と山麓での暮らし ー

長岡 正利

白山（標高 2702m）は、富山･石川･福井･岐阜県にまたがる両白山地の主峰であり、手取川･庄川･九頭竜川の水源地域にあたる。その主要な山域は「白山国立公園」に指定されている。山間部には古くからの多くの温泉もある。

白山は、気象庁の監視観測の対象となっている活火山である。山頂部には池などの火口湖もあり、一帯は火山特有の緩傾斜地形となっている。森林限界を抜けた山頂部には高山植物が多く、周辺には広大なブナ林が広がる。

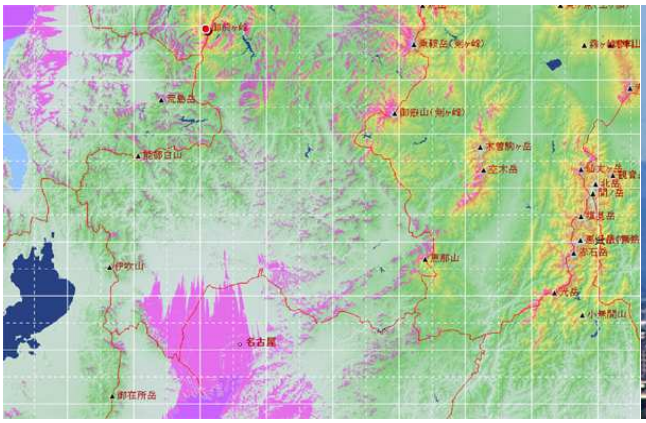
登山シーズンは夏と秋が主で、山頂日帰りも可能となっている。右は、登山者の多い石川県側でも、交通の便の良い旧･白峰村方面を中心とするもので、夏の最盛期には金沢駅からの直行バスもある。ただ、多くの登山者にとっては、マイカーと山麓駐車場からのシャトルバス利用で登る山となっている。

白山の主な登山道など（白山観光協会 HP「白山ベストガイド」より）

講演では、白山全般の紹介のほか、副題の分野について多くの写真によって説明します。

白山眺望—北に遠ざかりて雪白き山

白山の一帯は豪雪地のため、初夏の頃までは、遙か日本海や平野部から白雪の山なみを望見できる。下の写真のように名古屋から見えることもあり、神戸の六甲山からも見える。



白山からの可視域､上左が白山で下が伊勢湾｡(カシミール 3D で)　名古屋駅ビルから見た白山。(金沢大 WV-OB 森川さん撮影)

白山弥陀ヶ原からの御嶽山。その右に中央アルプスと、赤矢印が南アルプスの赤石岳。

上写真とは逆に、赤石岳から見た白山・御嶽・中ア・乗鞍。

左写真の白山山系を遠望(拡大)。左から三ノ峰・別山・白山山頂部・三方崩山など。

山岳展望の科学的方法について

白山から富士山はみえない

田代 博

Hiroshi Tashiro

182

(『岳人』1988.5月号より)

白山は古くからの信仰の山で、立山、富士山とともに「日本三名山」といわれ、「しらやま」や「越のしらね」の名で和歌にも詠まれてきた。孤立峰のため、北アルプスの多くの山頂からは、特徴あるその山容が望まれるほか、条件が良ければ、南アルプスからも見ることができる。

かつては、白山の別山から富士山が見えると信じられていたが、1988(昭和63)年に、「見えない」ことが立証されている。しかし今も、白山山中や近くの山にある方位盤での表示もあって、「富士山が見えた」と言った話しを聞くことがある。

白木峰にある方位盤。富士山が！？

石川・福井県境の取立山から見た白山。左端は手取川ダム湖、右は別山。(長岡撮影の写真を金沢大WV-OB加藤さんが調製。)

右が山頂・御前ヶ峰の白山比咩神社奥宮。その左に室堂と別山。中央は北アルプス方向。左は山頂の一部、大汝ヶ峰と剱ヶ峰。(同上)

6月末の山頂・翠ヶ池と、9月末の雪のない状態。前方(東)に、三方崩山と北アルプスを望む。

歴史に残る噴火が起こった火口の一つ。

(ともに、金沢大WV-OB山村さん撮影。)

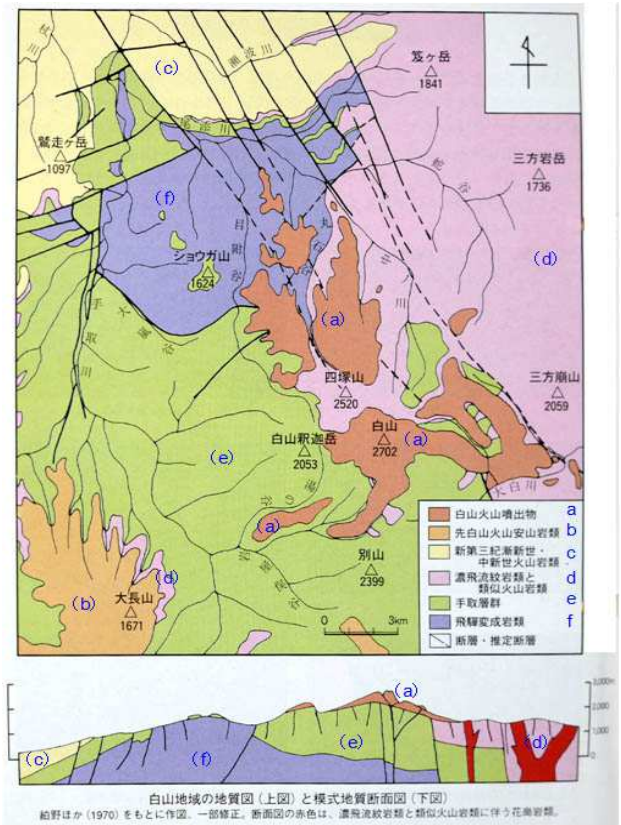
白山を彩る花々

白山は、明治前期から植物学者の訪れが多かったため、白山で採集･新種記載された高山の植物が多い。日本語和名の植物名でハクサンを冠するものが 20 種ほどあるそうだが、別名などを加えればもっと多い。高山帯のある山としては日本の西端であるために、白山を西限または南限とする植物が多い。次のような花々のほか、黒百合の群落も有名である。

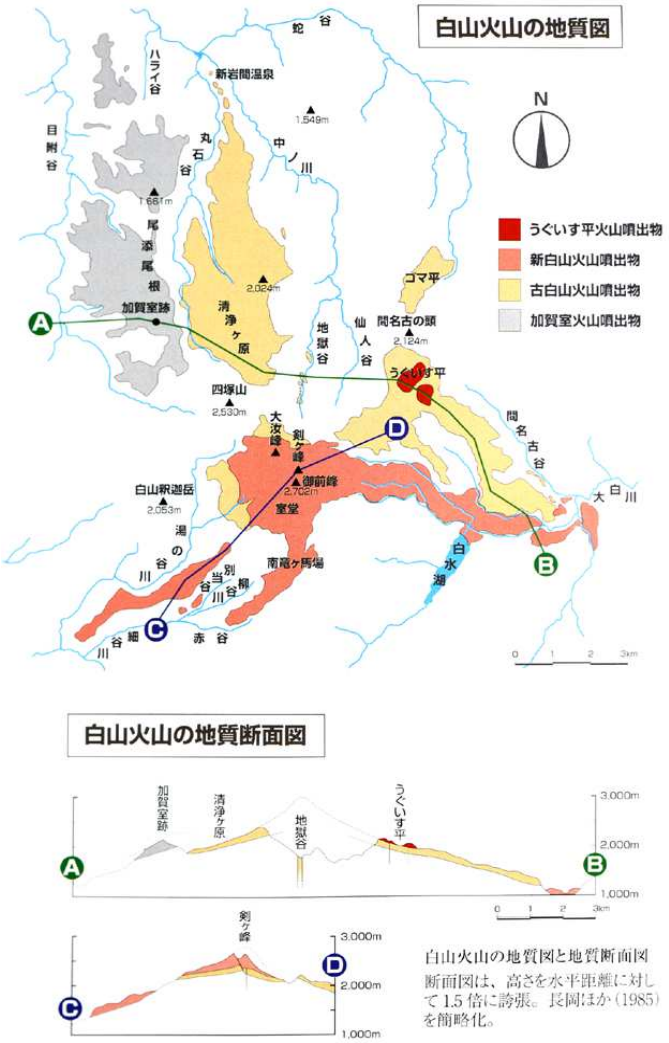
「ハクサン」を冠した、代表的な高山植物。左から、白山小桜、白山一花(イチゲ)、白山石楠花、白山千鳥。　　白山で有名な黒百合。

白山火山の地質とその形成史

白山火山は、全体として見れば標高 2000m ほどの基盤岩類の隆起域に噴出形成された火山体である。その形成は 30 ～ 40 万年前にさかのぼるが、現在の山頂部での噴火･山体形成は、３～４万年前以降である。なお、歴史



（白山の自然誌 27『白山のおいたち』白山自然保護センター、2007）



（白山の自然誌 34『新編 白山火山』白山自然保護センター、2014）

（この図は http://goo.gl/pYkE5m の５ p.に。）

史料に残る噴火としては、1042(長久 3)年の山頂火口の噴火では室(むろ)が噴石で埋まった。1554 ～ 56(天文 23 ～弘治 2)年にはマグマ噴火で、小規模な火砕流も発生した。1579(天正 7)年と 1659(万治 2)年の噴火では、火砕物の降下があった。

新しい方では、1935(昭和 10)年には山頂南西 2 km の谷で噴気孔の出現を伴う活動があった。

現在も、時には、山頂直下での微小地震活動が活発化することがある。

侵蝕による百四丈滝の後退。1970 年頃と 2008 年。
(右は、金沢大 WV-OB 加藤さん撮影。)

かつての白山信仰

山麓から秀麗な姿が望まれる白山は、古くからの山岳信仰の対象となっていたようだ。奈良時代になると修験者が信仰対象の山岳を修験の場とするようになり、白山では越前国の修験者・泰澄(たいちょう)が 717(養老元)年に登頂して「開山」した。「白山信仰」の始まりである。平安時代には、加賀・越前・美濃の 3 国に、山頂への禅定(ぜんじょう)(登拝)道が設けられて、各馬場には、白山寺・平泉寺・長滝寺が建立された。この禅定道のかなりの部分は、現在の登山道と一致している。

白山修験は、室町時代には比叡山延暦寺とも結んで大きな勢力となり、全国に白山信仰が広まった。明治以降の白山比咩(しらやまひめ)神社を総本社とする白山神社は全国に 2700 社余といわれる。

明治維新後の神仏分離・廃仏毀釈は、それまでの神仏習合を、強制的に神社と寺に改組した。山頂や各地に置かれていた平安時代以降の仏像や、石仏などの多くは破棄または別に移され、現在は一部が各地の寺などに静かに安置されている。

白山の三馬場と禅定道。 (白山の自然誌 21
『白山の禅定道』白山自然保護センター、2001)

白山の下山仏。白峰の林西寺：十一面観世音(重文:平安後期)と、山頂にあった十一面観世音。このように、白山の本地仏は良く遺された。

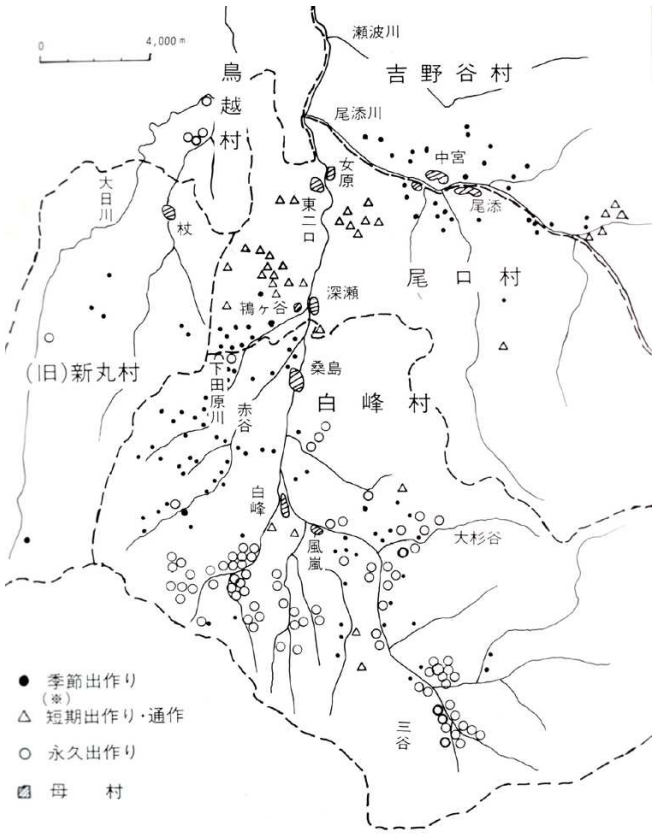
藤原秀衡寄進の、石徹白の虚空蔵菩薩(重文)。

(白峰・林西寺と、石徹白大師講のご好意により撮影。)

白山麓でのむかしの暮らし－山間部での出作り

白山麓には、古くから「出作り」といわれる農業･生活のかたちがあった。無雪期のみに山中に移り住むものから、年間を通してのものまで、かつてのその分布は図のようであった。谷間沿いには水田適地が少ないことから、山腹で焼畑耕作を主としていたもので、養蚕･薪炭業も盛んであったが、全国におけると同様に昭和 30 年代には衰退した。出作りは、その後も行われていたが、我が国の高度経済成長の終わり頃には、辺鄙な山間部には、一時的にせよ、もう住む人々はなくなり、その後僅かの間に、守る人たちのいなくなった家々は、豪雪のこともあって何時とはなく自然の中に埋もれ去ってしまった。

今、これらの家々とむかしの暮らしの有様は、旧･白峰村にある「石川県立白山ろく民俗資料館」に僅かに残されている。



昭和30年ころの出作り分布(幸田･1956より作成) ※1週間くらいの滞在

(白山の自然誌 7『白山の出作り』白山自然保護センター、1986)

白峰大道谷､五十谷の出作り。左は農耕が行われていた頃。耕作放棄されて茅原となり、今は植林された杉が育って、
五葉松の梢が杉の樹間に覗くのみ。

近年の話題－白山に雷鳥が

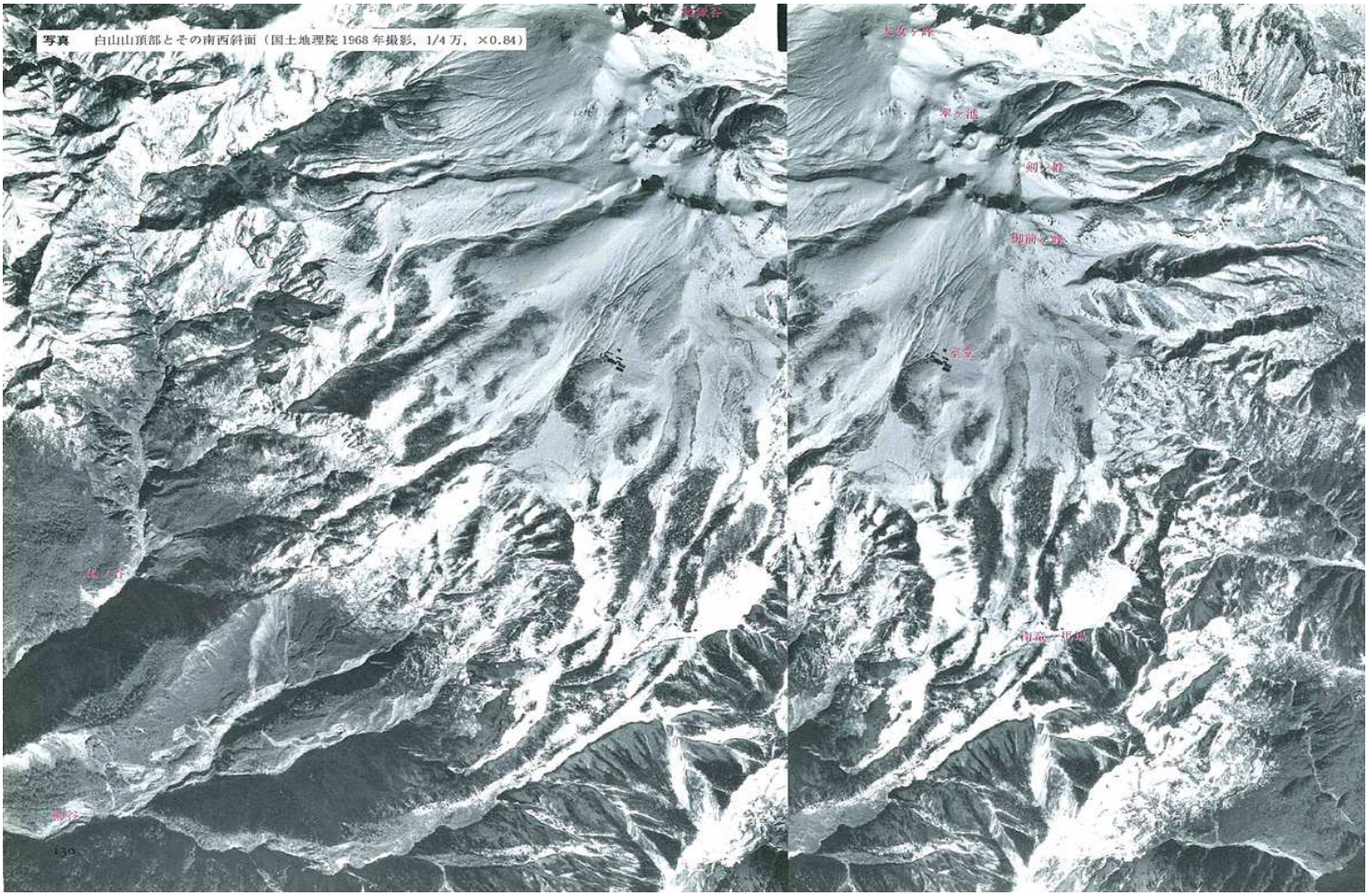
2009 年に、66 年ぶりに雷鳥が発見された。昭和の初期までは確実に棲息していたが絶滅したもので、現在の棲息地、北アルプスからは随分の距離がある。一方、昔は白山にはなかったコマクサも見られるが、これは趣味の人たちによる移植が繁殖したものである。

2009 年に白山で撮影･公表された雷鳥。
白山自然保護センター･上馬さん撮影。

国立公園昇格(1962)記念の初日カバー､玉井敬泉による白山と雷鳥の絵を配する。
右の玉井敬泉の絵(昭和辛卯(26)年)は､市ノ瀬･永井旅館提供。

【 白山山頂部の立体視（実体視）をお愉しみ下さい 】

左右の写真の間に葉書などを立てて、右目で右写真、左目で左写真を見ていると、あるとき突然に立体的に見えてきます。



（『空からみる日本の火山』荒牧･白尾･長岡編著､丸善、1989 より）

白山登山のお帰りに、おいしいものを

白山から流れる手取川の扇状地では、その良い水を使った日本酒が有名である。また、山間部で豆腐を持ち帰るために、古くから堅い豆腐が作られてきた。アクの強い栃の実を使った「とち餅」も、昔からの食べ物である。

白山麓の特産品。日本酒と、栃餅、堅豆腐、牛首紬（白山砂防科学館で）。

荒縄で縛って持ち帰った堅豆腐（上野とうふ店提供）。

トチの実でつくる「とち餅」（「志んさ」で撮影）。背後右は、今や後継者がお一人の、深瀬の檜笠。

演者のプロフィール：**長岡 正利**（ながおか まさとし）日本山岳会会員（会員 No.10752）同･科学委員

1947 年に富山県の旧･福野町に生まれ、金沢大学の卒論･修論で「白山火山の地質と形成史」をまとめた。国土地理院に勤務して、当時の環境庁と建設省河川局に出向。51 歳での勧奨退職後は民間企業に勤務し、65 歳以降はフリーに。現在、国土地理院客員研究員。 地図･写真･音楽･能が趣味で、カラコルムに志向。